

論文の内容の要旨

論文題目 焼跡と闇市——^{ナショナル・ランドスケープ}国民的地景と占領期の空間表象

氏名 逆井聡人

本研究は、アジア太平洋戦争直後の日本における空間イメージを分析することを通して、「戦後日本」の基礎として形成された〈焼跡〉という^{ナショナル・ランドスケープ}国民的地景とそれを解体する〈闇市〉的空間を弁別し、その〈焼跡〉と〈闇市〉の相剋を考察することを目的とする。また、本研究の主な対象は、占領期（1945～1952年）において提出された日本人作家、及び在日朝鮮人作家による文学作品が中心となるが、加えて映画作品や批評的言説も考察の対象として取り上げる。

焼跡とは、具体的には米国を中心とした連合軍による戦略的爆撃とそれによる火災で破壊された日本の都市部の被害箇所を示す。建物の残骸がポツポツと瓦礫の荒野に立つ焼跡の光景は、人々に日本という帝国の崩壊をまざまざと思い知らせると同時に、この光景が日本という国の被害者としての側面を象徴するものとして作用してきた。しかも皮肉なことは、この連合軍による被害は同時に総力戦体制からの解放と新しい日本社会をもたらすための基礎としても理解されたということだ。「灰燼から生まれ出る不死鳥のイメージを予兆する」ものとして、すなわち「日本の再生」を強調する記号〈焼跡〉として用いられてきた。つまり、〈焼跡〉という記号は、荒廃した都市のイメージを媒介に、日本の被害者性と「戦後日本」の起源を意味するものとして機能するということである。

一方で闇市は、日本敗戦の直後から列島の各都市に出現し始め、度々遅延する政府から

の配給では賄いきれない人々の日々の糧を非合法ながらも提供する、一種の民間セイフティー・ネットとして機能した。また、闇市には公定価格を度外視する法外な値段を強いる悪徳の温床としての一面もあり、長らく敗戦直後の日本社会や民衆生活の「不道德」や「混乱」状況を表す否定的な現象としても語られてきた。しかし同時に、その混沌が人々のエネルギーの発露として逆説的に評価される場合もあった。圧迫されてきた民衆の「解放区」であり、「戦後日本の原風景」という肯定的なイメージである。つまり闇市という空間は「敗戦後の混沌」のなかの「民衆のエネルギー」の象徴として位置付けられ、そしてそれもまた「戦後日本」を生み出す土壌〈闇市〉として記号化されてきたと言えるであろう。

このように〈焼跡〉は被害者性を、〈闇市〉は混沌の中のエネルギーを、それぞれ含意しながら共に「戦後日本」の始まりを刻印する記号として認識されてきた。そして敗戦直後の社会を論じる際には「焼跡闇市時代」といったように焼跡と闇市という単語はそれぞれ区別されることなく一括りにして語られてきた。「敗戦直後の混沌と無秩序という“祝祭的空間”という認識こそが「戦後日本の誕生」という神話を仮構するための下地となったと言えるであろう。

しかしながら、〈焼跡〉と〈闇市〉は果たして同様の働きをもって「戦後」という歴史認識を支える記号なのであるだろうか。〈焼跡〉が示す被害者性は、植民地支配／侵略戦争という加害者としての過去を「断絶」し「切り離す」ことによって成立する。そのことによって「新しい日本」を仮構するのであるから、まさに「戦後」という物語の構成要素は、そのまま〈焼跡〉という記号の中に集約されるといえるであろう。一方で〈闇市〉は、民衆のエネルギーであり、既成の秩序に対する人々のカウンター・カルチャーである。この場合、前提となるのは「抑圧されてきた民衆」という過去から継続した存在であり、歴史の連続性を強調する。これは断絶を条件とする〈焼跡〉とはベクトルが正反対の志向を持つ。この本来対立するはずの二つの記号を共存させる――加害の過去だけを断絶して、被害の記憶だけを継続させるためには、何らかの操作が必要になるはずである。それはどんなものだったのか。なぜ〈闇市〉という空間がナショナル・ヒストリーの起源の舞台、すなわちナショナル・ランドスケープ国民的地景に取り込まれることになるのか。

〈闇市〉に周縁性を付与し、その祝祭性・非日常性・価値転倒性を言祝ぐことは、実のところ最初から中心（〈焼跡〉）の物語の発生を予定し、サポートすることになる。まさに〈闇市〉が周縁として〈焼跡〉という中心に従属させられることによって秩序の物語としての「戦後日本」が発動するような力学をみることができるのだ。闇市が登場する文学や映画作品に対してこれまでの解釈の大多数が、この罫にはまり込んできた。闇市を評価することで、戦後社会の多様性や異種混濁性を見出そうとする議論は、結局のところ〈焼跡〉の論理に取り込まれて、「戦後」という概念を補強する読解にしかならなかったのだ。そしてこれは闇市の話だけではなく、権力の周縁に多様性や異種混濁性を指摘し、評価しようとする議論の多くが同じアポリアを抱えていると言えるだろう。

本研究においてとりわけ重要視する在日朝鮮人文学やその背景にある民族運動をめぐる従来の議論にも、闇市に周縁性（祝祭性、多様性、異種混淆性）を付与する議論と同様の論理を見出すことができる。占領期日本における朝鮮人作家の作品は、これまで在日朝鮮人文学、あるいは在日朝鮮人研究という枠組みの中で半ば孤立して論じられてきた傾向がある。そして在日朝鮮人文学を下位分類としてそのまま「戦後文学」という枠組みの中に投げ込み、日本文学の「収獲」（多様性・異種混淆性）として語ってしまうことになった。それは中心としての〈焼跡〉の論理が隠し持つ歴史の忘却の暴力性を無意識に機能させることになる。

近年日本人作家や評論家と特に親交の多くあった金達寿に関しては、占領期日本の言説空間の中で改めて位置付ける論考が提出されている。この試みは、そのような周縁性の収奪の構造から在日文学を引きずり出し、それ自体が持っている「戦後」という物語に対する破壊力を評価する新たな議論の場を創り出したと言える。本研究が共同したいのはそのような議論のあり方である。そのために本研究の後半においては、金達寿の占領期日本を描いた小説を同時代の日本人の小説と同じ土俵に置き、作品論的に分析を行う。そこで試みることは、日本民族中心の〈焼跡〉の物語には回収されない要素を拾い上げることであり、それらから紡ぎ出される物語空間を「戦後日本」の国民的地景ナショナル・ランドスケープの軛から解放することにある。果たしてここでも、〈闇市〉という空間が重要になる。在日朝鮮人と闇市は長い間結びつけられて認識されてきた。それは「第三人」という蔑称で闇市の暴力沙汰のすべてを旧植民地出身者に押し付けようとする言説が働いたことに大きな原因がある。しかし同時に、在日朝鮮人が（他の職を失った日本人同様に）闇市に頼らざるを得なかったのも事実である。なぜそのような状況に追い込まれたのか。そして「第三人」という差別が在日朝鮮人と闇市における関係性の何を隠そうとしていたのか。それを明らかにすることで、〈焼跡〉の物語には回収されない要素の実態がわかってくる。

〈闇市〉という空間はこれまで日本国内の社会現象として語られてきたが、実のところ〈闇市〉という空間の存在を規定する要素は戦後日本の領域内で収まるものではない。〈闇市〉とは帝国日本が崩壊した際に流動し始めた人々や物資、そして政策や思想の流れが再び冷戦構造の中に再編成されていくその折衝の過程に現れた空間である。つまり〈闇市〉という空間は必ずしも「戦後日本」の周縁ではないことがわかってくる。〈焼跡〉という国民的地景ナショナル・ランドスケープが〈闇市〉を中心一周縁の関係性に囲い込もうとすることは既に述べたが、実のところ〈闇市〉という空間にとっては〈焼跡〉が中心ではない。その中心を偽装した〈焼跡〉の向こうに別の大きな中心がある。それが冷戦構造を確立していくアメリカによって行われた日本占領の実態である。その実態を薄々感じさせしめる〈闇市〉は「戦後日本」の「破れ穴」と言えるだろう。本研究はそのような〈闇市〉像を改めて提示し、冷戦期東アジアという領域の一部として占領期日本を捉える。

このような問題設定の上で本研究では、敗戦直後の日本の空間を解釈するために用いら

れてきた日本民族中心の〈焼跡〉の論理を国民的地景^{ナショナル・ランドスケープ}として捉え、この国民的地景^{ナショナル・ランドスケープ}による〈闇市〉の囲い込みの力学を映画や文学作品から読み取っていく。一方で、〈闇市〉の表象をより綿密に検討することで「戦後」という一国史的な歴史認識を支える空間イメージを解体し、朝鮮半島や中国大陸の旧植民地との結びつきの中で「戦後日本」に代替する空間として「冷戦期日本」という枠組みを提示する。

【章立て】

序章

第1部 〈焼跡〉・〈闇市〉のイメージ編成

- 第1章 映される焼跡と語られない〈焼跡〉—戦後日本映画批評と焼跡表象
- 第2章 戦災復興と闇市—『20年後の東京』と『野良犬』にみる闇市の役割—
- 第3章 闇市とレイシズム—闇市の構造と取り締まりにおける対象変遷
- 第4章 物語のなかの闇市
- 第5章 原罪に代わるもの—戦後道徳と荒正人

第2部 戦後日本から冷戦期日本へ—と異郷—

- 第6章 田村泰次郎「肉体の門」論——「新生」の物語と残余としての身体
- 第7章 〈焼跡〉が〈闇市〉を周縁化する—石川淳「焼跡のイエス」論
- 第8章 宮本百合子「播州平野」をめぐる「戦後」の陥穽
- 第9章 金達寿「八・一五以後」における「異郷」の空間表象
- 第10章 生活のための闘争—民族教育と濁酒

終章

主要参考文献一覧

初出一覧